

地域生活移行エンパワーメント居場所事業

～ お互い支え合っています。

仕事づくり 居場所づくり ～



I シェルターのみinnで考えてみた!

—シェルター利用者居場所づくり意見交換ワークショップ—

----- 3

II できる仕事のことをinnで考えてみた!

—仕事づくりワークショップ—

----- 13

III 新たに居場所をつくってみた!

—特掃まつり—

----- 21

IV ここからできることを考える!

—仕事づくり・居場所づくりシンポジオン—

----- 33

I シェルターのみんなで考えてみた！

—シェルター利用者居場所づくり意見交換ワークショップ—



まずは集まってみた。顔を合わせて話をした。学生たちの応援も加わった。普段、普段、思っていることが、自分たちの声として集まりだした。



1. 概要

日時：2014年11月13日（木）18:00-21:00

場所：ふるさとの家

参加：32人

シェルターの利用者の声を集めようと呼びかけて実現した初めてのワークショップ。きっかけは、釜ヶ崎のまちづくりについて話し合いが行われていても、自分たちの声を集める機会がなかったからです。社会的に不利な環境においやられてしまい、仕事や住まい、自分たちが安心して生活できる居場所が不安定になると、意見を言っているのだからかと考えてしまいます。何が出来るか、まずは集まってお互いに耳を傾け合い、これからのことについて考えました。

シェルター（野宿を余儀される方のための一時的な寝場所）の利用者の多くは、既に高齢期にさしかかり、仕事もなく野宿生活をいられている人たちです。400人ほどが毎日利用しています。しかし、お互いに仕事に対する想い、暮らしに対する不安など、表に向かって発信するチャンスはあまりありませんでした。これを機会に、自分たちでできることを探る場をつくっていきます。



2. 流れ

1) 小さく集まって、大きく話す

今回は、4つのテーブルに分かれて、グループごとに話をしました。普段、シェルターの寝場所は、間仕切りなく並ぶ2段ベッドに、一日ずつ割り振られます。お隣同士気を使わないといけません。そのため、自由に話し合ったり、意見をするような雰囲気にはなりにくい状況でした。もっと気軽に話し合えるよう、小さなグループで想いを出すことから始めました。

2) 普段、言えなかったこと

グループごとの進行には、大学生たちの応援を頼みました。まちづくりや、建築、社会学など、いろんな視点を学ぼうとしている学生たちと、素のキャッチボールをしました。要求、要望だけではなく、自分たちにとって何が大切で、何ができるのか。その声を素直に受け止める役になってもらいました。

3) 期待と不安

今回は、何かを決める場ではなく、また議論を深める場でもありません。まずは、お互いにつながりながら話をしあえる場をつくる一歩です。この対話を積み重ねながら、いろいろと出てきた期待をカタチにし、また不安もともに解決していく動きに結びつけていきます。

メッセージ

「センターはあったほうがええんちゃうかな？ 朝みんなが集まる場所やから。社会医療センターもお世話になってたから、ここの人たちには大事な場所やで。またこんなんやってほしいわ。いい話し合いやった。」



3. 出てきた声

A グループ

1) 生活について

まずは、自分たちの暮らしについて、話をしました。「缶集めで生活」「特掃それ以外はアルミ缶拾い」など、自分でできる仕事を何とか見つけながら、しのいでいることがわかります。

また、「月・火・木・金がシェルター 土・日がドヤ」「特掃 5,700 円/回、3 日分のドヤ代 + 2,700 円で 1 週間ほどを生活」など、シェルターを利用しながら、仕事につけた分は、ドヤや食事に使うなど、働く意欲はあるが仕事につけていない状況がわかります。

「血圧と糖尿持ち」といった病気の心配もあります。

そして、「年金もあるから生保はまだ 75 歳になってから考える」というように、自分でできるうちは生活保護のお世話にはならない想いも大切にしないといけないことが見えてきました。

2) 居場所のひとつ、あいりんセンターについて

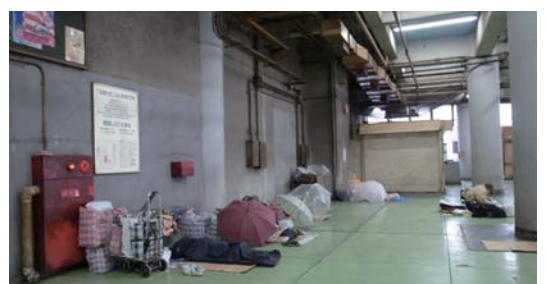
「たまに、または毎日センターを利用している」「釜へ来て 2 年、センター行ったことなかったが、やっと入れるようになった」「朝 5 時にシェルターを出てセンターで仕事をさがす」など、いろいろな使い方が見えてきました。

そんななか、「仕事がない時はセンターの 2 階でゆっくりと過ごす、1 階は手配師がおって落ち着けない」「シェルター朝 5 時に出了た後行き場所がない。朝 8 時までにはセンターで過ごしている」など、センターが居場所になっている一方で、必ずしも十分な自分たちの居場所にはなっていないこともわかりました。

3) 何ができるか

「仲間と話しが出来る場所がほしい」「みんなが水飲めるように」「運動できるような場所を」など、これからの居場所について、意見を出し合いました。

「雇用の環境をつくる、仕事を作ることはすばらしい」「仕事をもっと増えれば」「朝 9 時～夕方 5 時のフルタイムの仕事はきつい」など、いまの自分たちでできる仕事について、新しい働き方を探ることが求められています。そして、「このまちにも、子どもがたくさん来てほしい」「遊びが必要」など、ただ仕事づくりや居場所づくりだけでなく、地域やまちのことを前向きに変えていくことにも関心が高いことがわかりました。



3. 出てきた声

B グループ

1) まちのこと

「むかしの雰囲気を失うようなまちになってほしくない」といった、まちへの愛着も感じられました。いま仕事がなくなり、苦しい暮らしのなか、まちを大切にしたい思いがあり、まだまだチャレンジしたい気持ちもあります。「あいりんセンター2階の将棋のような場が、まちのあちこちにあつたらいい」というように、居場所もいろんな選択肢があればもっと活発に利用できるといった、他にはない釜ヶ崎らしさも、大切なことがわかります。

2) 仕事、そして西成労働福祉センター・あいりん職安について、

「仕事の種類を広げる。いまは経験者しかできない」「工場内作業などの、建設以外も紹介してほしい」など、仕事の幅を広げれば、まだまだ働きたいし、自分以外の仲間も生活が安定するという意見が出ました。これまでの働き方だけでなく、多様に選択肢を増やしていくことが、釜ヶ崎のまちにも求められています。

3) 医療センターについて

「入院用ベッドは仕切りぐらいあってほしい」「医療券をもらいに西成労働福祉センター3階へ階段をのぼって行くのは不便」「医療センターでもっと幅広く相談を」など、自分たちの状況にあつた改善を求める声も出てきました。しかし、「診てもらったからぜいたく言えない」「住民税払っていないので、大きなことは言いづらい」など、立場を気にした声も併せて出されました。

4) シェルターについて

「ベッドの仕切りがないのがつらかった」「シャワー15分はみじかい。20分ほしい。ブザー辛い」「シェルターに暖房、冷房ぐらいは入れてほしい。ぜいたくは言えないけども」など、人間らしく生きるために必要な支え合いを求めている、ごく自然な権利にも関わらず、十分には反映されていないことも伺えます。これからは、このような声を集めて、丁寧に形にしていくことが大切です。



3. 出てきた声

C グループ

1) いま、居場所となっているところ

「三徳寮の図書館」「三徳寮の談話室」「禁酒の館」「公園」「ふるさとの家」など、いくつかの施設や開放されているスペースなどが挙げられました。利用の仕方、「横になる」「雨、風がしのげる」「お金がなくても過ごせる場所」など、野宿生活という状況でも安心して過ごすことのできる居場所は、とても重要なことがわかります。ただ、「お金があれば簡易宿所」というように、自分たちで働いて、自分たちの居場所を確保することも大切なことがわかります。不利な状況に追いやられてしまった中での、「安心」「いつでも利用」がキーワードになっています。

2) どんな居場所が理想的か

「お金があれば、映画などを楽しむ」「息抜きのためのお金と場所は必要」など、仕事とお金、お金と居場所はセットで考える必要がありそうです。「気軽に参加できるレクリエーション」「イベントの情報掲示」「医療の相談窓口がほしい」「高齢者向けのハローワーク」「24時間オープンな相談窓口」など、いつものちょっとした楽しみやその暮らしに関する情報、あるいはいざというときの窓口があり、そして安心できる居場所が求められています。他にも、「洗濯できる場所」「荷物をおける場所」「食事をしてもいい場所」など、生活の一部として捉えられています。そして、「どんな人でも気兼ねなくいてもいい場所」というのが、共通の大きな想いとして出てきました。

3) 相談できること、できないこと

「釜ヶ崎に来た当時は相談しに行っていたが、現在は行かなくなった」といった、当事者と相談窓口の距離感を示す意見が出ました。そして、「市立更生相談所で相談したが、まともに取り合ってもらえず、以降は行っていない」「役所も市更相も相談しに行きたいとは思わない」「市更相には相談に行きにくい」「いま信頼できる相談窓口は思いつかない」といった、信頼関係で成り立つ相談先が確保できておらず、孤立してしまいがちな状況になっていることがうかがえます。また、相談を通じて利用した施設も、その後「出たときが何も無いからしんどい」といった、切れ目ない支援がないことで、再び野宿生活になり、次につながる仕事や安定した生活へのステップが踏み出せないでいることがわかります。

4) まずは仕事から

だからこそ「できることならなんでも」。仕事をしたいという想いは強くだされました。「軽作業、短時間作業ならできる」といった、実感にそくした可能性を探ることがポイントになりそうです。

3. 出てきた声

D グループ

1) 地域の実態として

例えば社会医療センターについては、「社会医療センターは、たまに行く」「社会医療センターは、行かない」「西成労働福祉センターで券をもらって、無料低額診療制度を利用している」など、それぞれの事情がうかがえます。また、「シェルターを出て午前8時まで休けいする」といった、あいりんセンターの利用の実態や、「特掃は4、5日に1回ほどまわってくる」など、少ない仕事の状況がわかります。そんな中でも、「娯楽室は冬のすきま風で寒いけど、夏は涼しい」「困ることもあるけど、いいことも多い」といった、生きていくことを工夫している様子をお互いに確認できました。

2) このまちのこれから

「西成労働福祉センターは必要」「相談も紹介も必要」といった、いまある仕事の紹介や相談の機能がこれからも求められていることがわかります。昔ほど仕事はできなくなっているけど、働く意欲はまだまだあり、いまだからこそ「できる仕事」をつくる必要性がありそうです。

それに合わせて、「シェルターはもう少し長く居られるといいけど」といった、居場所としての機能の充実や、「社会医療センターは必要」「よその病院に行くとお金が必要だから社会医療センターがないと怖い」など、健康面についての不安を解消することも大切です。

「お風呂やお年寄り向けの娯楽センターがあればいいのに」といった、年をとったからこそ必要を感じられるものを声にしていきました。







Ⅱ できる仕事のことをみんなで考えてみた！ —仕事づくりワークショップ—



アルミ缶を、つぶして集める。少ないけれどお金になる。
いまの自分たちにできる仕事をもっと増やしたい。
つぶすことから、ふくらますことへ。



1. 概要

日時：2015年1月8日（木）15:00-18:00

場所：特掃事務所横、アルジェリアテント

参加：31人

シェルター利用者居場所づくりワークショップでは、幅広く自分のことやまちのこと、仕事や居場所について話が出てきました。そこで感じたのは、集まって何か新しいことが生み出そうとするときの予感と活気です。ここでは、地域の雇用を生み出すために社会的な就労支援事業として勝ち取ってきた「特別清掃事業」（以下、特掃）の利用者、そして高齢になっても「ひと花咲かせよう」を合言葉に、地域に貢献し、孤立せず互いに助け合うプログラムを実施する「ひと花プロジェクト」の利用者を交え、より具体的にできることを話し合いました。

それぞれ、自分でもできる仕事の選択肢が増えればやってみたいと思う人（特掃）や、生活保護を受けながらも、地域の役に立ちたいという人、できる仕事をしたいという人たち（ひと花）が集まりました。これまで日雇労働者として汗を流してきた仕事とは違う、これからの自分たちでもできる働き方を模索しました。

そのためにちょっと加えた新しい視点は、デザイン。このまちではあまり見聞きしない言葉ですが、釜ヶ崎を日本に、世界に発信しながら、事業を生み出していくための、素材を見つけ出していきます。



立木祥一郎

tecoLLC 代表。アート、映像、食、建築、都市計画、デザイン、IT、ツーリズムなど幅広いジャンルを手がける。地域の人々がまちの魅力を引き出すために何ができるかを考える。「地元の人が地元の凄さに気付かないのは当たり前のこと」。埋もれている街の魅力やパワーを「プロジェクト」として結びつけていく。

2. 流れ

1) 外からの視点を加える

アートやデザイン、食や映像など幅広いジャンルからプロジェクトを起こしてきた立木 祥一郎さんに来ていただき、釜ヶ崎の素材をすくいあげてもらいました。今回は、グループにはわかれず、みんなで自己紹介から始めました。そんな中、普段はあまり感じてなかったことでも、「こんなことでも面白いのでは」といった驚きや、「こんなことができるんだ」といった発見がありました。意外なみんなの得意分野が出てきました。

2) 得意分野を伸ばす

好きなことと、できることをつなげていく。一人ひとりの得意分野をつなげていくと、仲間やまちの特徴へと広がっていきます。それが、この釜ヶ崎ならではのものとなり、ここだからできる新しい仕事へと発展していくのではと考えました。その第一歩として、得意分野を見つけ出し、自己アピールをできる場として、みんなでおしゃべりしました。

3) 期待から実現へ

出てきたアイデアは無数に。その中から、実現可能性の高い素材を立木さんとのコラボレーションでピックアップしました。ふくらんでいく「みんなで集まって形にしていきたい」という想いを大切にしながら、次へとつなげていきます。

メッセージ

「食べ物やものづくりや何か僕らでもできること。あるのかな～？って考えてみんなで良いものを作る為に話し合えたことに感謝。貴重な御意見を先生ありがとうございます。なんか頑張ってみますわ！」



3. 出てきた声

1) 話のきっかけ

おじさんたちとの話のきっかけとして、こんなキーワードから話題を広げていきました。

- ・釜ヶ崎の魅力はなに？
- ・まずは、好きな食べものや、おすすめのお店は？
- ・それから、得意なこと、好きなことなどもアピール
- ・地域の魅力を、例えばおみやげに！
- ・伝えるツールとして、ガイドブックなどもできるのでは？
- ・そこから広げて仕事や暮らしの中の活動につなげていくには？

2) 自分をアピール、自己表現からでてきたもの

それぞれの自己紹介から出てきた声をまとめてみます。そこからは、自分の好きなことや、地域のおススメのお店、こんなことができるという発見など、さまざまな声が挙がってきました。

Aさん

- ・年金や特掃が中心、でも自力でお金をためてがんばっている！
- ・ホルモンが大好きで、新今宮ガード下のお店で月に1度は！
- ・西成を活性化しながら、みんなで楽しくしたい

Cさん

- ・教会のお手伝いで、カレーづくりをおぼえた
- ・ものをつくることで、楽しむことも、自立することもできる
- ・例えば、毛糸をほだいて、新たに作品をつくることも一つのアイデア

Dさん

- ・天神橋が地元で、商店街のお店はよく知っている
- ・ここではローソンやスーパー玉出にいつもお世話になっている
- ・自分でつくるカレーはこだわっていて、3種類のお肉でコクを出す

Eさん

- ・昔、えんどう豆の皮むき機などの機械を製作してきた
- ・えんどう豆は食べるのも好き

Fさん

- ・JR新今宮駅ガード下のホルモンがおススメ
- ・たまに沖縄料理とかもつくる

3. 出てきた声

3) みんなでワイワイ話ながら出てきた声

得意なこと、楽しいことをみんなでワイワイ語り合っていると、自然と新しいアイデアも生まれてきます。立木さんのセンスも加え、どんなプロジェクト=仕事につながりそうか、考えてみました。

○プロモーション映像をつくる

- ・楽器づくりや、劇づくり、歌、ダンスなど、映像で発信
- ・ゴスペル演歌などのPVなども
- ・あいりんセンターで撮影するなど、このまちの特徴を出す

○ゆるキャラをつくる

- ・釜やんグッズの開発は？
- ・釜やんは、かわいくないから、もっとゆるいキャラがほしい

○ひまわり名所

- ・散歩したりするのに、楽しめるひまわり畑を
- ・油も採って活用
- ・他にも、コスモスなどいろんな花でまちを彩る

○放送局

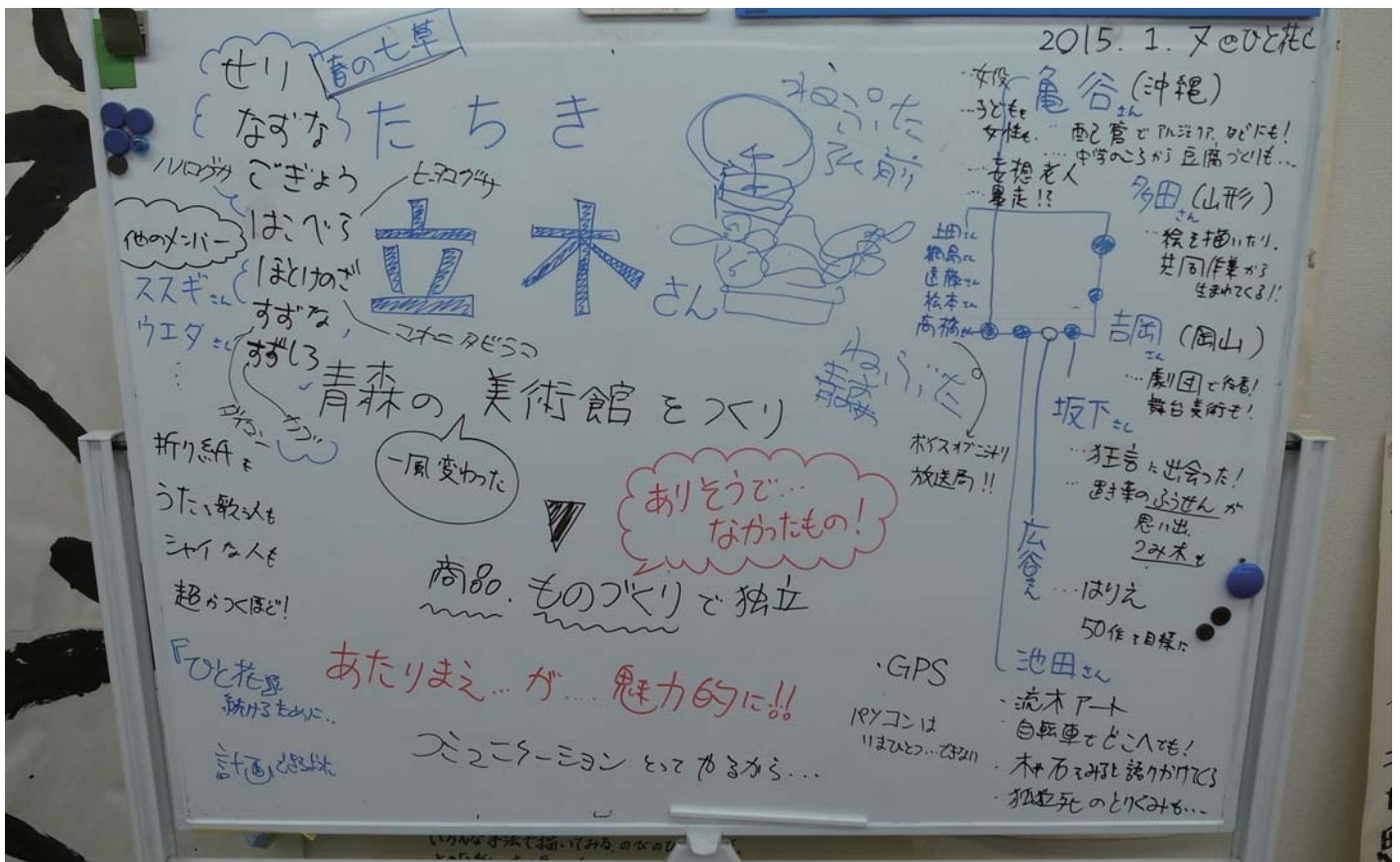
- ・ネットラジオ、コミュニティFMなど、安く簡単にできそう
- ・ラジオも500m半径なら（微弱無線局）、無線局の免許が不要
- ・ラジオ局づくりを夢としてあたためていた人も！

○ホルモン× ???

- ・ホルモンカレー、炊き出しバージョン
- ・ホルモン雑炊、炊き出しバージョン
- ・大量につくる炊き出しの技とおいしいホルモンを組み合わせで商品化
- ・レトルトパックなどで、炊き出しの味をそのままに！
- ・ホルモンバーガーなども、おいしい！

○畑しごと

- ・ひと花プロジェクトの畑で栽培したものを活用
- ・たとえば、野菜をつかって、別の商品に
- ・釜ヶ崎のおみやげに展開！



4. もう一つのつながり・広がり

「ひと花センターワークショップ」

日時：2015年1月7日（水）16:00-18:15

場所：ひと花センター

参加：10人

ひと花メンバー（65歳以上、生活保護受給者）の暮らしからできることを探すために、立木さんと話をする場を設けました。身近な好きな食べ物やお店のことや、それぞれがしてきた仕事のことなど、みんなで輪になって語り合いました。おじさんたちのエネルギーを感じる声を紹介します。

- ・共同作業をするから、いろんな絵が浮かんでくる
- ・ひと花に来て、狂言に出会い、演劇に目覚めた
- ・貼り絵づくりをしており、50作品を目標に展示もしたい
- ・とにかく自転車好きでどこへでも！最近、電車の乗り方を忘れたくらい
- ・見つけた流木や石を見ると、語りかけてくるものがある
- ・ひと花センターに来て、アルコール依存症も克服
- ・孤独死しないよう、見守りや仲間づくりの取り組みもはじめた
- ・こどもの里など、地域の子どもたちとよく遊ぶので、子どもにも人気
- ・チャレンジできる居場所がないと、充実した生活はないかも



4. もう一つのつながり・広がり

「地域の若者たちのまちおこしコンテンツ・ワークショップ」

日時：2015年1月8日（木）19:00-21:00

場所：釜ヶ崎支援機構北事務所2階

参加：9人

このまちに関わりのある若い人も集まり、新しいまちおこしのコンテンツを考えました。つくりたい、やってみたいという意欲のある人をつなぎながら、この地域でプロジェクトをおこしていくためのアイデアを出し合いました。地域を巻き込んでの仕事づくりのヒントになりそうなひと、こと、もの、場所を探るワークショップです。その中で出てきたアイデアを実現していくには、若い人のチカラを活かす仕組みづくりが大切になりそうです。

- ・釜ヶ崎ならではの情報の発信と観光
- ・このまちのことで伝えたいことを詰め込んだメディアをつくる
- ・外からひと、もの、そしてお金が入ってくるようなコンテンツに
- ・それがつながり、新しい仕事に

Ⅳ 新たに居場所をつくってみた！

—特掃まつり—



身近なものから新しいアイデアが芽を出した。
もう少し前に進めそうな、そんな予感も出てきた。

祭



祭



祭

祭



祭



祭

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業

特撮祭り

と

く

そ

う

ま

つ

気軽にきてや!

**日時：2/22 (日) 会場：特撮内****開催時間 13:00 ~ 15:00くらい 参加無料!!**

食

喫茶コーナー



おいしいものありまっせ



ブース

特撮の歴史&みんなの自慢コーナー

- ・特撮の歴史を振り返ります。
「写真展示・ビデオ上映等」
- ・みんないろんな特技や趣味を持っています。



ヘルス

健康相談・歯科相談・手マッサージコーナー



健康や歯のこと相談してください!



ゲーム

ビンゴゲーム



少し豪華な景品が当たるよ!

参加無料

ブース

ものづくり展示会(デコチャリ・流木アートその他)

みんなで作ったもの・この町で活躍しているものを集めました!



その他

ミニコンサート・衣類出し・ビッグイシュー



催しものがたくさん♪

THE BIG ISSUE JAPAN

NPO法人 釜ヶ崎支援機構

THE BIG ISSUE JAPAN

THE BIG ISSUE JAPAN

その他イベントあり。 ※イベント内容が変更となる場合があります。

メッセージ

「最初はうまくいくかいな～って思ったけど、当日になってみんな一丸となってめっちゃ楽しそうに祭りを盛り上げてくれた。ホームレスの方もこんな催しにワシらでも参加させてくれるのか?!と喜んでくれたことにやって良かったと思っています。」





1. 概要

日時：2015年2月22日（日）13:00-16:00

場所：特掃事務所詰所、アルジェリアテント

参加：174人

小さな集まりから始まったワークショップ。それらを通じて感じた、もっとみんなとチャレンジしてみたいという想いを形にしました。特掃まつりは、ただのイベントではなく、自分たちのチカラで、仕事や居場所づくりにつながるアイデアを実験する場です。いろいろ試してみる。そして失敗も重ねながら、いろんな人が集まる「まつり」から、継続的なプロジェクトを模索していきます。

いつも輪番で顔を合わせている、ともに仕事をしてきた仲間たちと、のびのびと新しいことに取り組む機会になりました。

2. 流れ

1) いろんな実験、いろんなプログラム

できることを集めた「まつり」。たとえば、自転車再生や、盆栽、流木アートなど、ものづくりに触れる場をつくりました。また、写真展や、ステージ、相談会などの、居場所づくりにつながる場も用意しました。特掃のスタッフや地域の団体、そして特掃に登録する労働者が協力しながら、自分たちができることを形にしたまつりです。構想や準備段階からつくる過程をともにし、一人ひとりが主役になれるいろんなチャレンジを通じて、地域と自分たちの価値を再発見していく実験の場となりました。

2) まつりは1日、準備は1か月

プロセスをともにする。まつりは1日で終わってしまいますが、それまでの準備から、いろんな関わりを模索しました。仕事仲間だけの関係から、一緒にまつりをするという関係に変わったとき、いろんなできることが見えてきます。一人ひとりの得意分野で活躍できる、そんな1か月になりました。



ものづくり

自転車 自転車



これまで、自転車のリサイクル事業をしていたときに感じた、もっと釜ヶ崎らしい、そして売れる自転車をつくりたい、という想いを実験しました。今回は、デコ（デコレーション）とエコ（エコロジー）をかけて、人口芝生で飾り付けてみました。その場で、いろんな人が手を動かしながら、へんてこかつ癒される自転車ができ上がりました。

ものづくり



盆栽



ワークショップで出てきた「盆栽もできる」とい声を形にしてみました。
盆栽づくりをみんなでやってみるコーナーでは、若い人たちと交流しながら、
細かい手仕事を行いました。

ものづくり

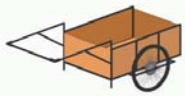


流木アート



自転車でどこへでも行く人が集めた流木をつかって、作品づくりと展示を行いました。ワークショップで出てきた声をヒントに、挑戦しました。ちょっと見方を変えると、ぐっと面白くなる。その気づきをチャンスに、いろんなものづくりを模索していきます。

居場所づくり



特掃 歴史写真展



写真も集めてみると、いろいろな情報が集まってきます。顔見知りだったけど亡くなった人の思い出、センター夜間開放の思い出など記憶が集まり、つながりが深まります。展示の準備段階から、特掃の労働者が活躍しました。一つひとつ丁寧に写真を展示していく地道な作業を引き受け、完成させました。主体的に取り組む場をきっかけに、新たな能力の発揮にもつながる、そんなプロセスも共有できました。

居場所づくり



一緒につくる炊き出し



釜ヶ崎は、いま孤立の問題が深刻です。単身の高齢者が多数を占めるなか、食事は一人、料理を誰かと一緒に作る機会は、ほぼありません。そこで、一緒にワイワイ言いながらつくる炊き出しをしました。これをきっかけに、毎週1回、料理教室を行っています。新たな居場所の始まりです。

居場所づくり



ビッグイシュー / 健康・歯科相談 / ステージ



それぞれのコーナーで、ものづくりや居場所づくりを実験しながら、そこから出てくる声をきちんとキャッチできるように、気軽に相談できるコーナーも用意しました。その場で、仕事や健康、今後の生活についてなど、地域団体などの協力を得ながら相談会を開きました。

また、まつりとしての楽しみや喜びを分かち合うためにステージもみんなで作りました、交流の場にしました。



メッセージ

「いままで10年近く特掃が主体となっていくなうイベントがないと思っていました。今回発起人となり、始めました。200人近くの方が集まってくれたこと、これからの釜ヶ崎をどうしていくか楽しく、そして真剣に交流を深めたことに感謝しています。手伝っていただいた、各団体や個人の皆様方々へは本当に感謝しております。ありがとうございました。是非、次回もやりましょう！！」

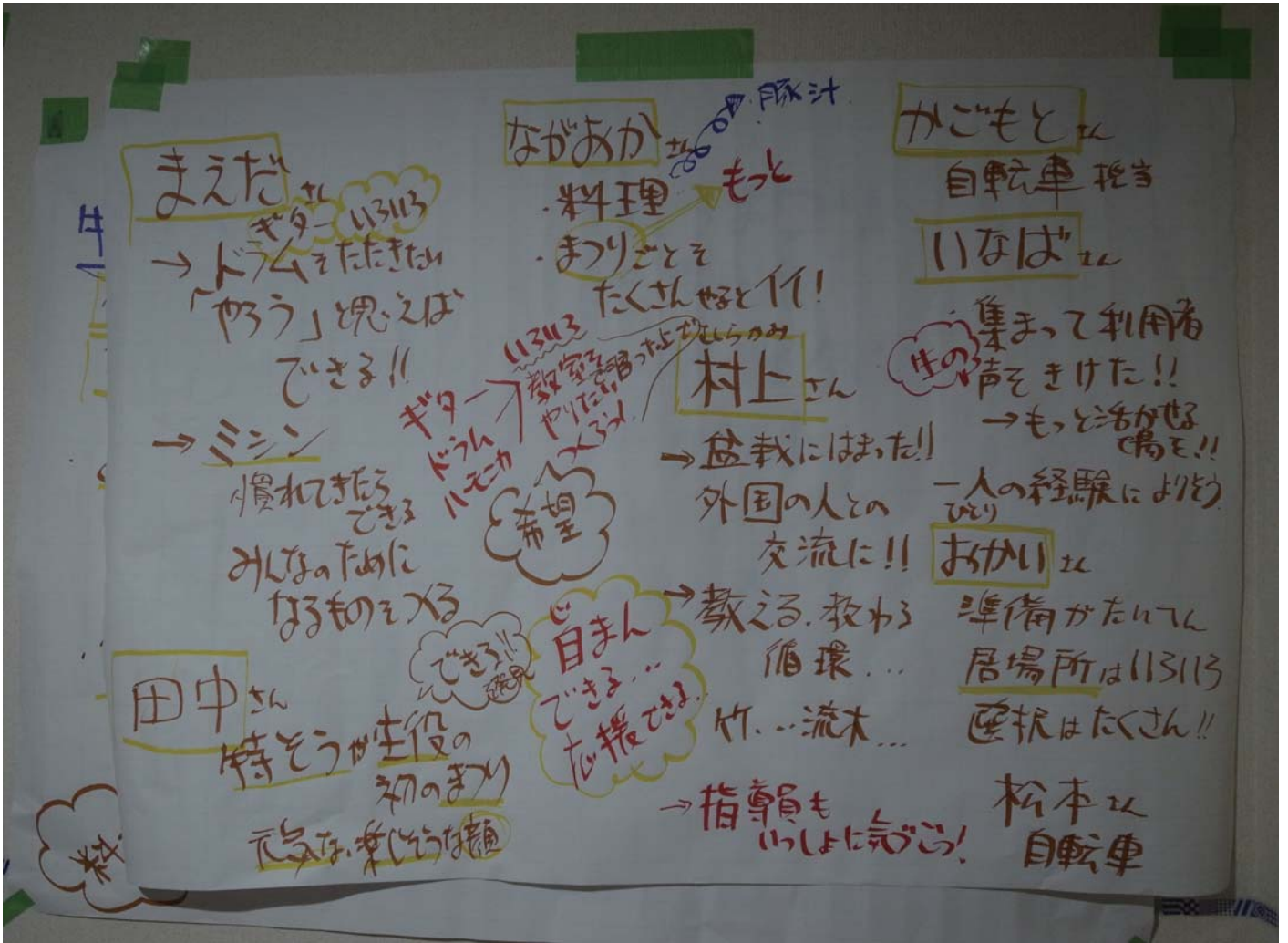


Ⅳ ここからできることを考える！

—仕事づくり・居場所づくりシンポジウム—



始まりはここから。仕事も居場所も自分たち+αで切り開く。
まだまだ続く、地域福祉の挑戦。



1. 概要

日時：2015年3月31日（火）16:00-19:00

場所：アース2階会場

参加：15人

この事業を通じて見えてきた、これからの仕事づくり・居場所づくりについて、これまで関係してきた人に呼びかけ、議論しました。ただ、まとめの会に終わらせるのではなく、次へのステップに踏み出せるよう、新しいアクションについて意見を出し合い、考えました。

地域生活移行エンパワーメント居場所事業の成果は、集まって考える対話の場を生み出したこと、そこから実際にやってみるチャレンジができたこと、そして仕事・居場所づくりの一手手前の具体的な案を共有できたことです。次は、この集まって考える場を継続しながら、より自立に向けた事業へと発展させていき、一人でも多くの人がこのまちで仕事をしながら、このまちの居場所ですつながりながら、暮らしていける地域社会をともに模索していきます。

2. 流れ

1) 集まって気づいたこと

一度でも社会から排除された人たちは、自分を表現することに対して萎縮しがちです。まずは、小さくても集まることで、個々が積み上げてきたものを出し合う機会をつくりました。表現することを恐れずに、仲間と広げながら共有することで、自分たちの得意分野に気づくきっかけにしていきました。

2) まつり=実験で気づいたこと

社会的排除は、自らを伝える表現だけでなく、チャレンジをする機会も奪います。だからこそ、やってみる場が必要でした。まつりを通じて、自分たちの得意分野を実際にいろんな人に披露してみることで、新しい仕事や居場所につながるヒントが見えてきました。それらを再確認しながら、次に向けて何ができるかを考えました。

3) ここから始まること

それら考えをしっかりと受け止めて、この地域でおこしていけるプロジェクトをイメージしました。この会には、シェルターの利用者、特掃の利用者、特掃のスタッフ、地域で活動する人、地域に関わる若者などが集まり、いろんな立場から、異なる視点で仕事・居場所づくりについて議論しました。とくに、これまで埋もれていたおじさんたちのチカラを引き出す、次へのプロジェクトとしてまとめました。



3. 出てきた声

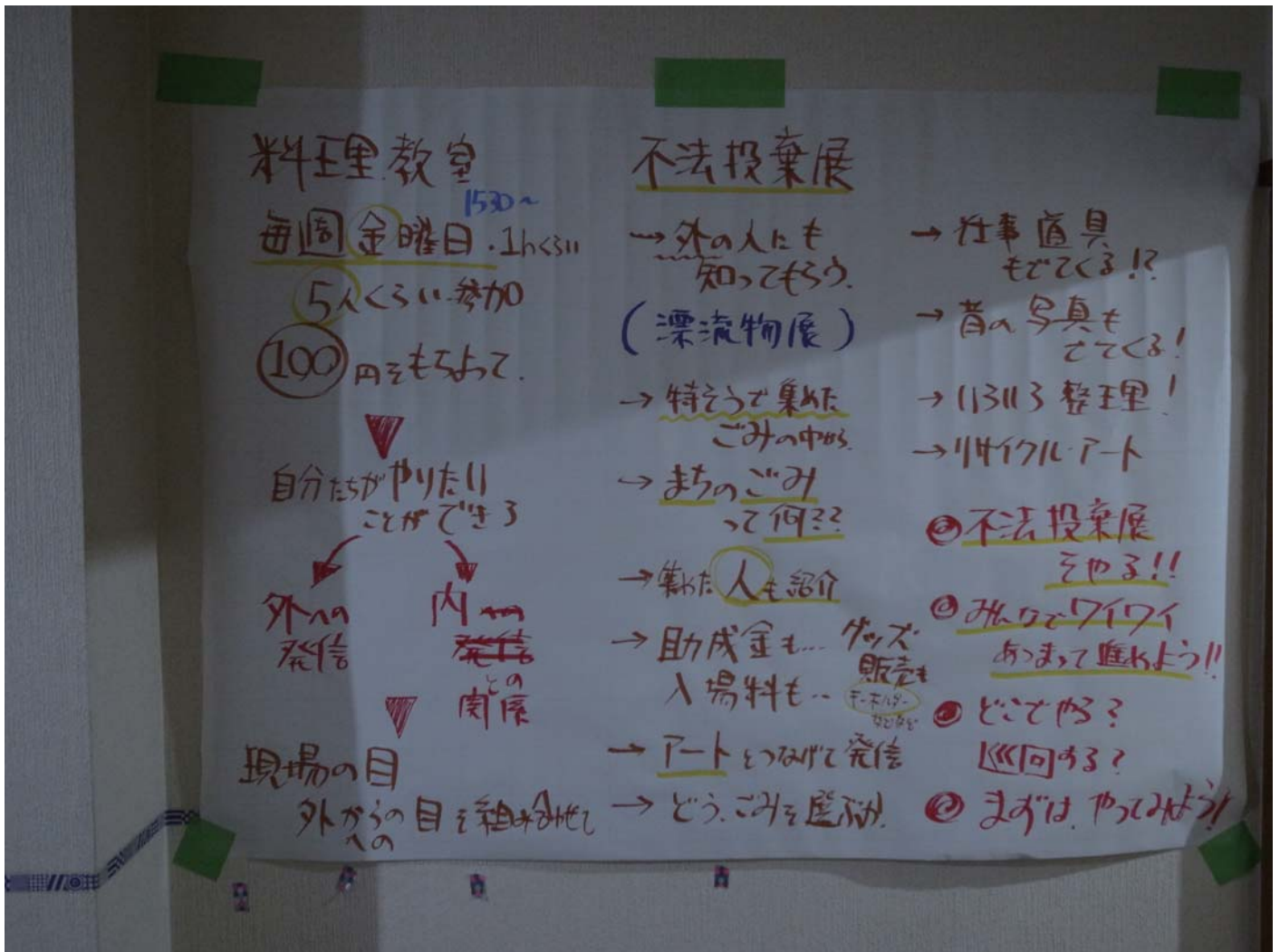
議論の中で形になりだしたプロジェクトを中心に、紹介します。

○盆栽づくり

- ・盆栽づくりが得意な人から、仕事づくりへと広げる
- ・海外でもブームになっている盆栽はビジネスチャンス
- ・外国人や若者と盆栽づくりワークショップをすれば、交流の場にもなる
- ・仕事を通じて、社会とつながる機会にしてい

○不法投棄展

- ・特掃で行っている地域の清掃で集めてくるごみに注目
- ・釜ヶ崎は不法投棄ごみが多く、重大な課題
- ・それを展示することで、社会に向けてその課題を発信
- ・自分たちの仕事をアピールしながら、展示から派生する仕事につなげる



3. 出てきた声

○オリジナル自転車

- ・自前の自転車リサイクル事業を活用
- ・釜ヶ崎オリジナルの自転車を商品開発
- ・外国人旅行客も多いこの地域で、釜ヶ崎+日本をアピールできる自転車に
- ・販売の他、カスタマイズやデコレーション、レンタサイクルなどにも展開
- ・いろんな仕事の場面を想定していく

○いろんなアイデアを持ち寄る場づくり

- ・これまで、自由に対話しみんなで考える場が少なかった
- ・このような場を、今後も開催しながら考えを形にしていく
- ・いろんな視点が交わるよう、例えばデザインのプロにも呼びかける
- ・これまで弱かったデザインを味方につけて、埋もれた得意分野を発揮



4. 新たな視点

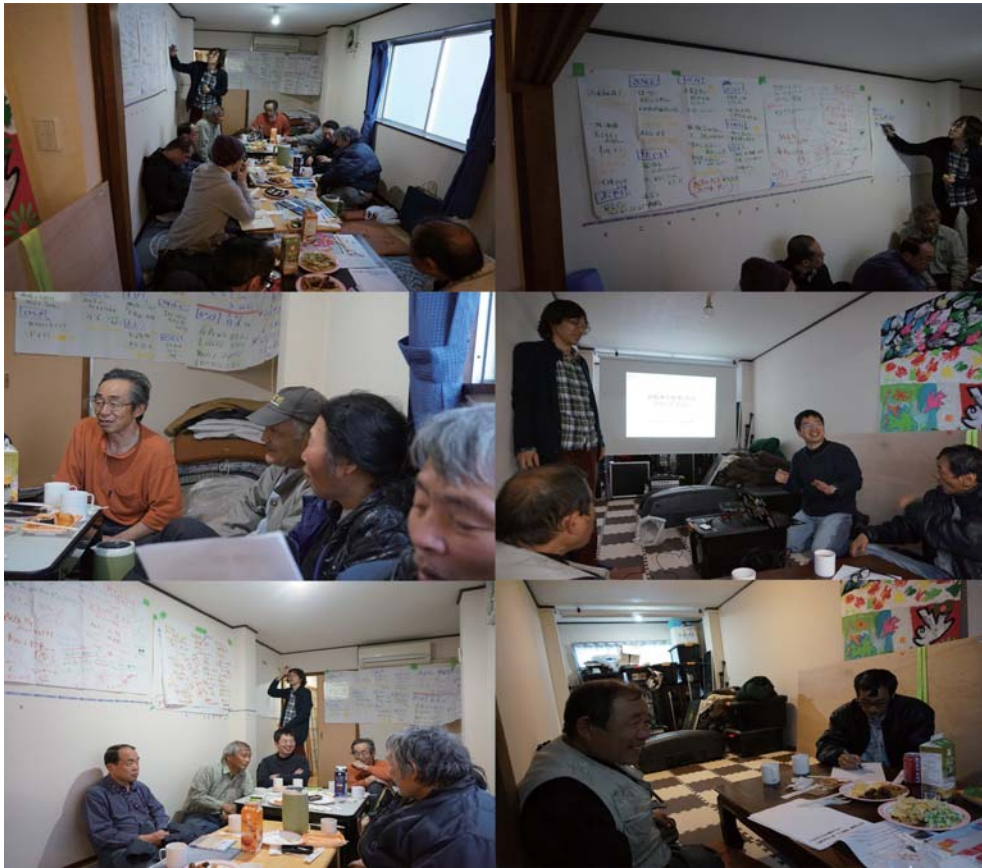
今回は、村上さんを交え、いまおじさんたちが日々の中で行っている仕事や暮らし、趣味などを一緒に見たり、触れたり、話したりしながら、デザインとアートから見方を変えてみました。どういうことかという、例えば、いつも特掃の地域清掃で集められてくるごみ。不法投棄が多く、問題となっていました。毎日のように清掃し、最近では見回りをする事業も行われています。村上さんは、その問題をもっと社会に向けて発信するという視点から、不法投棄の展示会をしては、と見方を変えました。「壊れた機械や、昔の写真、まだまだ使えるものなど、いろいろ捨てられている」「拾った人の名前や声も一緒に展示する」「いろんなところで巡回展示して、みんなに知ってもらいたい」など、いままで出てこなかったアイデアや、自分たちを発信できるという自信がわいてきました。

村上さんをはじめ、若い写真家やプロダクトデザイナーや地域で福祉に取り組む人などが、特掃まつりや、シンポジオン、ワークショップなどを通じて出会い、つながりました。これからも、新しい視点を加えながら、特に若い人とともに固定化していた見方をやわらかくほぐしながら、仕事づくり・居場所づくりの選択肢を増やしていきます。

村上史博

patch-work 代表。高齢者と若者が同じ趣味を通じ、そこにデザインのフィルターを通して高齢者と若者の世代間交流を活発にし、社会的孤立の未然防止モデルをつくりだす。65歳以上になってからが面白い！と思えるような、新しいチャレンジに取り組んでいる。





5. まとめ

自由に話し合う機会を作る「ワークショップ」、実験から広げた「まつり」までの幅を行き来しながら、「地域生活エンパワーメント居場所事業」として、この半年間取り組んできました。野宿生活、高齢化、孤立、生活困窮など、仕事と居場所に深く関係した課題が、釜ヶ崎にはいまだ山積しています。しかし、これは釜ヶ崎だけの問題ではなく、社会が釜ヶ崎から目を背けてきたためでもあります。ここからできることは何か？まずは、内からもう一度、いまの暮らしを掘り下げて考えてみました。その時に借りたチカラが外からの目です。今まで背けられてきた目を、デザイナーや若い人たちの視点をくわえながら、ここから、このまちで、できることを探りました。

結果、わかってきたことは、まだまだ集まりの場が足りないことです。今回の集まりで出てきた声のうち、アイデア段階のものも多く、また相談会などを通じてフォローできた事例や、料理教室など自主的に動き出した取り組みも、規模としては小さなものです。具体的な仕事づくり・居場所づくりを通じて、地域生活移行をエンパワーメントする動きの一步手前までたどり着けたところです。

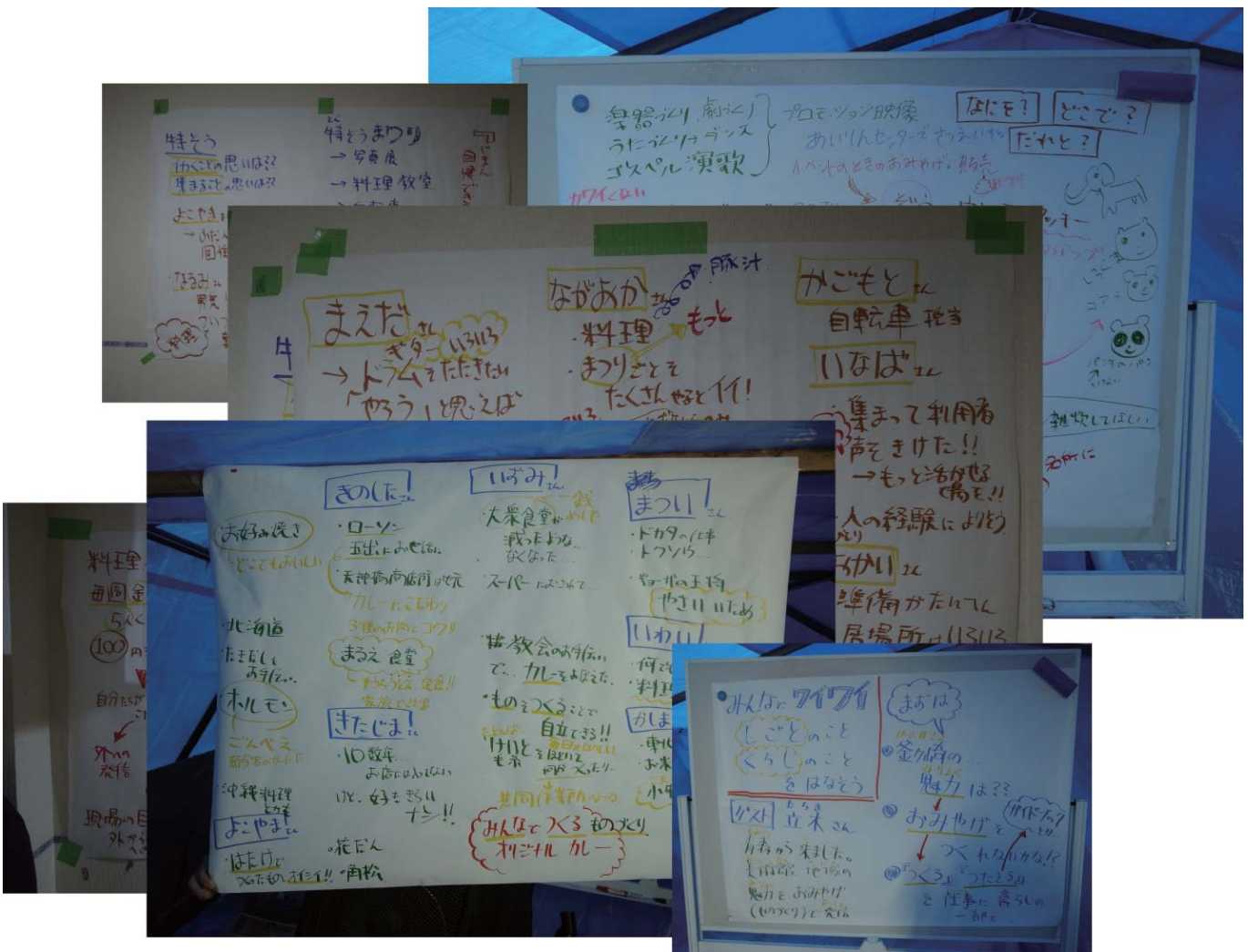
「まだまだやれるで」を合言葉に、居場所づくり、そして仕事づくりに発展させ、生活困窮など社会の課題として徐々に認知されはじめているテーマに、地域のチカラで切り込んでいきます。

6. 地域の側面として (アンケート調査より)

今回の事業では、いろんな視点で、これまで地域生活の移行が困難とされてきた人たちの実態を把握し、そこによりそいながら実践を積み上げていくことを目標にしました。

釜ヶ崎では、特掃は約 1,300 人、シェルターは約 400 人と、多くの人たちがこれら仕事や居場所に関わる支援を利用しています。支援の現場では、日常的に接する中だからこそ見えてくる実態は多くあります。しかし、そこからでは気づけない課題もあり、今回は現場と異なる視点を持つ人たちのチカラも借りて、少しずつ掘り下げていきました。地域の自治会関係者、福祉施策に関わる行政関係者、社会学や経済学、地域福祉の研究者の視点もあわせ、アンケートを行いました。

そこから見えてきたものは、1) 仕事に対する意欲と、それにあった選択肢の欠如、2) 仕事の選択肢が増えることでの、生活費の充足の可能性、3) 相談に対する距離感と、健康状態の悪化、4) 生活保護に関する理解の不足と、周辺の見解、などです。生活保護への理解はこれからの課題ですが、生活保護だけでなく、小さな仕事を増やせば、これまで利用してきたシェルターなどの支援を減らせる可能性も捉えることができました。今後、さらに丁寧に声をすくいあげながら、地域生活へ移行できる選択肢を検証し、釜ヶ崎だけでなく生活困窮などの社会課題への一つのモデルとして精度をあげていきます。



平成26年度 独立行政法人 福祉医療機構社会福祉振興助成事業
地域生活移行エンパワーメント居場所事業 報告書

平成27年3月31日

NPO法人 釜ヶ崎支援機構

〒557-0004 大阪市西成区萩之茶屋1丁目5番4号

TEL: 06-6630-6060 FAX: 06-6630-9777

<http://www.npokama.org/>

連携団体

NPO法人 生活サポート釜ヶ崎

NPO法人 まちづくり今宮

NPO法人 こえとことばとこころの部屋

NPO法人 HEALTH SUPPORT HINATA

“まだまだやれるで”

